

[文] 時澤圭一 (ベトナムスケッチ編集部)
[写真] 井口和歌子
[取材コーディネーター] Nhan Phuong (ベトナムスケッチ編集部)

市場、寺院、映画『愛人／ラマン』の舞台を巡る

中華街チヨロン

ベトナムでは旧正月をテトと呼び、盛大に祝う。今年は1月26日がテトに当たり、これからだんだん祭りムードが漂ってくる。旧正月を祝うことに限らず、ベトナムでは、1000年以上この国を支配した中国の影響を見ることが出来る。そして、ホーチミン市において中国文化の中心地といえるのが、中華街チヨロン (Cho Lon) だ。
急激に都市化が進むホーチミン市の中にありながら、今も混沌とした雰囲気を残すこの街を歩いてみた。

華僑がつくりあげた市場

ホーチミン市は、今もサイゴンという旧称で呼ばれることがある。だが正確にいうと、サイゴンの街だけがホーチミン市となったのではない。ベトナム戦争後の1976年、サイゴン、ヤディン、そしてチョロンの三つの地区が統合されて、ホーチミン市となったのである。

チョロンはホーチミン市の中心部から南西約6キロに位置し、5区、6区、10区、11区にまたがる。17世紀後期、明郷の人々（明朝遺民）が清朝の迫害を逃れて来たのを始まりに、その後、広東、福建、潮州、客家、海南出身の中国人がベトナムへと移住してきた。これら華僑は、運河があつて近隣国との交通の便がよく、布や食品の卸売り業が盛んなチョロンに住むようになった。ホーチミン市統計局によると1920年のチョロン地区の人口は約9万4千人という記録が残っている。

存在であるビンタイ市場を指す。ビンタイ市場は、広東省北部沿岸の潮州出身で、くず集めから身を起し、水牛の皮や米などの販売を手がけて財を成した商人、クアック・ダムによって1928〜30年に建てられた。中庭を囲むように建物を配置する中国の伝統的な家屋建築様式「四合院」が用いられ、屋根には龍の装飾があらわれている。ビンタイ市場は、当時の華僑たちにとつて、故郷を偲ぶような存在だったのかもしれない。

チョロン最古、最大のビンタイ市場には現在、衣類や金物、食料品などを扱う1000店以上がびっしりと軒を連ねる。店のほとんどが問屋であり、昔から卸売り業の街としての歴史を継ぎ、今に伝えている。

チョロンには、ビンタイ市場のほかにもいくつもの市場があり、それぞれユニークな名前を持つ。たとえば、日用品から食料まで扱うキム・ビエン市場は、ベトナム語でカンボジアの都市名のプノンペン市場という意味。色鮮やかな布が道を飾るソイキンラム市場は、この地にある集合住宅の名前が、そのまま通称になっている。トゥーンサードンカインという正式名があるのだが、

誰もがソイキンラムと呼ぶ。

混沌の街に横たわる身分差の中で

フランス統治時代に多くのフランス人が住んでいたことから、「西洋人村」という名前の市場もある。それが、サータイ市場。フランス人作家マルグリット・デュラスの自伝的小説『愛人／ラマン』の映画のロケ地としても知られている。15歳の貧しいフランス人少女と、裕福な華僑青年との情事シーンの撮影は、サータイ市場の一角にあるフレンチコロニアル様式の建物の部屋が使われた。

フランス統治下のベトナム（仏領インドシナ）では、フランス人はこの街をショロンと呼んだ。デュラスの小説でもこの呼称が使われている。

デュラスが過ごした1930年頃のチョロンにおけるフランス人、ベトナム人、華僑の生活はどのようなものだったのか。話を聞きたいと思いつけることができなかつた。そんな中、1950年代のチョロンのことなら覚えていたというゴー・ティー・ムックさん(70)に出会うことができた。ムック

クさんの親は広東出身という。「私はベトナムで生まれました。ヤディン省からチョロンに来たのは1955年、17歳の時です。そのころフランス人はそれほど多くなく、時々見かける程度でした」

宗主国から来たフランス人と、植民地のベトナム人や華僑との間には、やはり社会的な地位に隔たりがあつたことは容易に想像できる。

「フランスとのインドシナ戦争の翌年で、南北が分離されたベトナムの南部では、まだ抗仏ゲリラ戦が続いていたんです。街の中では、兵隊がパトロールしていました。フランス人のことを怖いと思ってましたね」

当時を振り返って一番強く思い出すこと、それは生活が苦しかったことだったという。ご飯もろくに食べることができず、着るものにも困り、使い古した荷袋で服を作つたほどだった。

ムックさんが過ごした時代から25年前に、フランス人少女と華僑青年との恋愛の舞台となつたチョロン。恋人が集うロマンチックな街というよりも、デュラスと華僑青年のように、人目を忍ぶような関係が似合う。そう思ってしまうのは私だけだろうか。



1: 歴史を感じさせるフレンチコロニアル様式(左側)とカラフルな外壁の新しい建物が並ぶチョロンの大通り
2: 旧クアック・ダム邸。今はアパートになっている
3: 映画『愛人/ラマン』の撮影が行われたサータイ市場
4: 「生活が大変だった」と昔を振り返るゴー・ティー・ムックさん



今に受け継がれる信仰心

チヨロンは市場の街であると同時に、寺院や祖先の霊を祭る廟の街でもある。豪華な装飾を施した壮大なものが多く、華僑の財力がいかに強大だったかをうかがい知ることができる。寺院のところがどこに見られる漢字や、門が南向きという点に中国らしさが現れている。これは風水によって、南は温暖で、発展や旺盛の方向とされているためだ。華人は信仰心が篤く、チヨロンの寺院には年中、参拝者が訪れる。特に旧暦の1日、2日、14日、15日、16日、30日は大勢の参拝者でにぎわう。チヨロンで最も古い歴史を持つ天

后(ティエンハウ)廟は、18世紀に建てられた。天后という中国の航海の女神が祭られていて、今も華人たちは海外へ移住する際、この廟に立ち寄り、渡航の安全を祈る。そして、無事に行くことができたら、移住先から再びこの廟にやってきて感謝を捧げるのだ。関帝廟(フックアンホイクアン)は、商売繁盛の神・関羽を祭る。中国の武将でもある関羽は華人に人気があるように、チヨロン最大の廟である義安会館にも巨大な像が立っている。

そのほか、観音菩薩を祭る観音(クアンアム)寺や、幸福の守護神として明代に大航海を行った鄭和を祭るという二府廟(オンボン寺)などがあり、チヨロンは寺院・廟巡りには格好の街といえる。さらに、仏教寺院だけでなく、教会やモスクもある。ひよつとすると、この街には昔からどんな人々でも柔軟に受け入れる雰囲気があったのではないかと。そんなことも華僑がチヨロンを安住の地に選んだ理由の一つではないだろうか。

先に述べたように、今回の取材ではベトナム戦争前のチヨロンについて知っている人を見つげるのに苦労した。昔からいた華僑のほとんどは外国へ移民してしまっていたからである。ベトナム戦争の終結後、それまで経済的な繁栄を謳歌してきた華僑は、苦境に立たされた。社会主義の政策によって民間の会社は国有化され、華僑はベトナム国籍を取得するよう迫られ



1: 食堂「大娘水餃」のグエン・ティー・カム・ピンさん。中国出身の夫から料理を習った 2: ピンタイ市場に漂うにおいてはここから? 3: 天后(ティエンハウ)廟 4: 市場の勤務時間は朝5時~午後7時 5: 中国・華南地方の南獅の獅子頭 6: 観音(クアンアム)寺 7: 創業60年の老舗「南龍飯店」 8: 海外移住した華人からの寄付(天后廟)

た。中国へ引き揚げる華僑も多く、さらに1979年の中越戦争勃発によって、海外へ脱出する者が増加した。ベトナム戦争前は約60~70万人だったチヨロンの人口は、戦後、十数万人にまで落ち込んだという。だが、チヨロンはこのままでは終わらなかつた。1986年から始まったドイモイ(刷新)政策によって市場経済が導入され、国外に脱出していた華僑が戻ってきた。ベトナムはアメリカによって約20年間、経済制裁を科されていたが、チヨロンには物資が豊富にあった。それらは香港やシンガポールからの食料や日用品で、国境を越えて広がる華僑のネットワークによっても

たらされたものだ。「チヨロンには香港がある」——人々はそういつて、買い物に出かけたという。急がない、焦らない街 チヨロンには、下町風情があるといわれる。地方からやってきて商売をしているからだろうか、人々は素朴で人懐こい。オフィスビルが立ち並ぶ1区で暮らし、洗練されつつあるベトナム人とは明らかに違うように感じられる。日本に住んでいたことがあるベトナム人に言わせると、「1区は東京、チヨロンは大阪」なんだそうだ。

開発が進むホーチミン市の中にあつて、チヨロンは取り残されているといえるかもしれない。でも、それは間違いだ。チヨロンは決して急がないし、焦らない。これまで、人が流出しても、いつか帰つて来て、にぎわいを取り戻してきた。世界各国の中華街にもいえることだが、何か人を惹きつける魅力が、この街にはあるのだ。1964年にチヨロンへ来たという潮州華人のチュン・リエン・トゥさん(83)は「チヨロンは昔から変わつちやいませんよ」と言う。その通り。変わったのは人だけ。チヨロンの街は変わつてはいないし、これからは変わつてはいけないのだ。